



# セカンドの女

---

---

あんず

---

## 友達どまりの女

<http://p.booklog.jp/book/33715>

著者：あんず

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kojiro-sasa/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/33715>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/33715>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.

## 出会い

---

直樹から来たメールを見て、愛美は深いためいきをついた。

家族連れやカップルなどでにぎわう昼間のデパートで、こんな寂しいメールを受け取るなんて、今日は本当についてない。

「結局さあ、彼女が一番大事なんだよ。アイツは」

独り言を言う痛い女に成り下がった自分が物悲しい。

直樹と出会ったのは、会社の先輩が幹事の合コンだった。

見た瞬間から胸は高鳴り、せっかくの出会いの場なのに直視できないほどだった。

それでも左手の薬指だけはチェックし、「しめしめ。既婚者じゃないな」などと、心の中でガッツポーズをした。

「直樹さんは、彼女いないんですか？」

体をしならせて上目遣いで見ると、直樹は白い歯を見せて「いないよ。残念ながら」と言った。

あんな顔で爽やかに言い切られたら、一体誰が心の暴走を止められるというのだろう。

少なくとも愛美は、その瞬間にノックダウンしてしまい、恋心は一気に燃え上がった。

「アイツ、絶対嘘ついてるよ」

次の日、会社のトイレでメイクを直しながら、先輩が言った。

「そんなことないですよ。そんな風に疑ってばかりだと、出会いのチャンスが減っちゃいますよ」

「そうかなあ・・・」

腑に落ちない感じの先輩をよそに、愛美は心の中で「見る目がないから、そんな歳まで独身なのよ」と悪態をついた

。

その晩、直樹とはじめてのデートだった。

待ち合わせは会社から直ぐの場所にしてくれたし、何度も確認のメールをくれたりして本当に優しい。

今まで付き合ってきた男達にはないがしろにされてきたので、慣れていないせいか余計に舞い上がっていた。

「ごめんね。待った？」

気合が入りすぎて待ち合わせに30分以上も早く着いてしまったのだが、待つのだって少しも苦にはならなかった。むしろ、待っていたら彼が私をめぐりて来てくれるのだと思うと、こんな幸せなことはないとさえ思ったほどだった。

そんな愛美に優しく声を掛け、とろけるような笑顔で頭を撫でてくれた。

(こんな人と付き合えたら最高！)

二度目のノックアウト寸前の愛美は、目をキラキラさせながらうっとりとして直樹を見つめた。

## ステップアップ

---

薄暗い店の中で、愛美はわざと飲めない酒を飲んで酔っ払った。

完全個室になっていて、この空間には二人しかいない。

もし少しでも気に入ってくれているなら、直樹の方から何らかのアクションを起こすに違いない。

「何だか眠くなってきちゃった」

頬を赤く染めながら言うと、直樹はそっと手を回して抱き寄せた。

酔っ払っているはずなのに、頭が変に覚醒してしまう。あまりにもドキドキが大きくて、その音が聞こえやしないかハラハラしながら何気なく直樹の顔を見上げた。

斜め下から見る彼もまた格別だった。

これは好みの問題なのだろうが、端正なサッパリとしたマスクに少し低い声は正にストライクだった。更には大きな手が愛美を夢の世界へといざなう。

「これからどうする？」

耳元で直樹が囁いた。

一瞬で色々な想像が膨らみ、余計に顔が赤くなる。

「直樹君に任せる・・・」

任せたら行くべき場所の一つだということは分かっている。だけど、ここで勝負に出なかったらきっと後悔するのではないか。

頭の中に浮かんでくるのは、愛美の背中を押す言葉ばかりだった。

「出よう」

少し緊張した顔で、直樹が立ち上がった。

そして愛美の肩を抱え、大通りから裏道に入っていく。

足がもつれてうまく歩けないが、それも上手にエスコートしてくれた。

「どこにあるのかな」

辺りを見渡す姿にもキュンとしてしまう。

(遊び人だったらどうしようかと思ったけど、慣れていないのね)

ここまでの彼は100点満点である。あとは大概、減点方式により無残な点数になっていくのだが、直樹に限っては、このまま満点で突き進んでくれそうな気がした。

やがて奥まった場所にあるホテルに到着し、一番高い部屋を選んだ。

エレベーターに乗りながら彼は「緊張するね」と言った。

愛美もこれから起こるであろうことを想像し、恥ずかしくなっとうつむいた。

秋晴れの土曜日、愛美は会社の近くのデパートまで買い物に来ていた。

本来なら家の近くで用が済むのだが、仕事帰りにフラッと寄って一目ぼれしたスカートがあり、ちょうど良いサイズがなかったので取り寄せてもらったのだ。

せっかくの週末だからと直樹も誘ったが、男友達との先約があるからと断られた。

「いつもありがとうございます」

店員が鼻にかかった声で言った。

お客様扱いをされると気分がいい。初めて来たお店だったのだが。

「このスカートには、こちらのジャケットなんかも合いますよ」

すすめられた物を見ると、確かにオシャレな組み合わせに思えて手にとってまじまじと見つめた。

(ゲッ、2万円・・・)

スカートはセールで5千円のものだったが、それでも精一杯だったのに、4倍もの値段を出して買う勇気は無い。

「すみません。他のも見えます」

「どうぞ、ごゆっくりご覧ください」

そそくさとその場を離れたが、ああ言った手前すぐに帰るわけにもいかず、何枚か手にとって元の場所に戻す動作を繰り返していた。

そろそろ店を出ようかと思った時だった。聞き覚えのある声が、コートの掛かっている向こう側から聞こえてくる。

恐る恐る離れた場所から確認すると、やっぱり直樹だった。

愛美の手は怒りでワナワナと震えた。男友達との外出などではなかったのである。

可愛いロングの髪がよく似合う女の子と一緒にいた。

息を殺して近づくと、二人の会話がよく聞こえてくる。

「これ、サトに似合うよ」

「そうかなあ。ちょっと大人っぽ過ぎないかな」

「いや、全然。むしろこういうのを着たら絶対に雰囲気変わると思うんだけどな」

「え〜。じゃあ、どちらの方が好きなの？大人っぽいのと、いつもみたいなのと」

「サトは、どっちでも可愛いよ」

聞いているこちらが恥ずかしくなるぐらいのバカカップルな会話である。

その場で乗り込むこともできたのだが、ここは証拠を固めるために泳がせることにした。

二人は何かを買うわけでもなく、色々なお店をのぞいた後、カフェに入って行った。

すかさず後を追いつき、後ろの席をゲットしたが、直樹はちっとも気付く様子ではなかった。

「直君、浮気してないでしょうね」

「してないよ。心配ならGPSつけてもいいよ」

この辺りで、愛美の頭の中にはクエスチョンマークが沢山浮かんでいた。

どうも話がおかしい。

(浮気相手はあなたでしょう?)

初めは信じて疑わなかったが、一体どちらが浮気相手なのだろうか。

その時、サトと呼ばれている彼女が衝撃の事実を口にした。

「付き合って2周年記念、忘れないでよ」

「分かってるって。もうプレゼントだって用意してあるんだぜ」

頭をゴーンと打ちつけられたような衝撃を受けた。

全部ぶちまけてしまいたい騒動に駆られながら、唇の端を噛みしめた。

## 鬪いのゴング

---

「昨日どうだった？」

「えっ、何が？」

昨日のことはおくびにも出さずに、何やかやと理由をつけて直樹を呼び出していた。

質問された直後、一瞬だけ直樹の目が泳いだのを見逃さなかった。

「友達と出掛けてたんでしょ？どこに行ったんだっけ」

「ああ、その事か。えーっと・・・」

きっと今言い訳を考えているに違いない。いつもの愛美なら、詮索などせずお互いの自由を尊重していたので、答えを用意していなかったのだろう。

しどろもどろになった直樹を、更に攻撃し続けた。

「昨日さあ、大変だったんだよねー。買い物していたら、しつこい男に声掛けられちゃってさ」

全くの嘘である。

自分の彼女の危機を知り、どう出るのかを観察していた。

「それは大変だったね」

額にはうっすらと汗をかいていた。

<なるほど、人間は嘘をつくとき汗をかくものなのね>

努めて冷静に振舞った。変に責め立てたりしたら、間違いなくサトの元に行ってしまう。

「あんまり責めるなよ。悪かったって」

敵もさるもので、当分口を割りそうにもない。

「心配してくれないの？」

少しスネた口調で上目遣いに見つめると、何故か直樹は急にシャキンとして愛美の手を握った。

「心配するに決まってるだろ。今度からは一緒に行くからな」

力強い言葉に、<まだ私にも勝機はあるかも>と密かに喜んだ。

もしサトからも同じことを言われたら、やっぱり同じ返事をするんだろうな、などと考えたら悲しくもなったが、直樹への気持ちが大きくなりすぎて、その手を振り払うことはできなかった。

その時愛美の中で密かに恋愛バトルのゴングが鳴った。

<絶対負けないわ>

にっこりと微笑みながら、頭の中では既に次の手を考えていた。

# クリスマス

---

12月に入ると街はイルミネーションで彩られ、至る所にクリスマスのモチーフが飾られた。

「もう、そんな季節なのね」

浮かない顔をしているのは、クリスマスイブの日中しか逢えないと言われたせいである。

自分が不幸な時は、周りの人が幸せいっぱい輝いて見えるから不思議だ。

羨ましくて妬ましくて黒い感情に覆われてしまった愛美には、人の幸せを「良かったね」と祝福できる心の余裕が残っていなかった。

イブさえも逢えないカップルから見たら「何贅沢言ってるんだよ」と叱られるかもしれない。それでも、イブの夜から翌日までのメインをサトに奪われて、セカンドであるという現実を受け入れざるを得なかった。

最近知ったのだが、直樹は手帳を2冊所持していて、愛美との予定にはブラウンのものを使っていた。こっそり家探しして見つけたもう一冊の手帳は直樹の好きなパステルグリーンで、中にはサトとの予定やデートの思い出がギッシリと書き込まれていた。

愛美用の手帳には必要最低限のことしか書いておらず、メモらしきものは一切なかった。愛情の差をまざまざと見せ付けられて、愛美は心底落胆した。

一緒に居る時に、「忘れないうちに書きちゃおうと。大事な予定だからな」と言っていたのが、実はどうでもいい位の予定で本当に忘れそうだから書いていたのである。

あれから波風を立てるようなことを避けていたが、対決の日は近いと思い始めていた。

身を引くことも考えたが、直樹が何の制裁も受けないままサトと幸せになることだけはどうしても納得できなかった。

サトにも自分の存在を知らせて、少しでも苦しんで欲しいと思った。

付き合っていくうちに、直樹の好みが大人っぽい女性だと知り、今まで着ていた服はタンスの奥にしまった。なるべく理想に近づけるようにと、服装はもちろん、メイクまで変えて彼好みになれるようにがんばってきた。

(でもサトさんには、そのまま良いって言ってた・・・)

無理と嘘で固められた女が、そのまま受け入れてもらえる女に勝てる訳が無いのだ。

飲みかけのレモンティーを飲み干すと、残った氷がいきなり真っ二つに割れた。

(縁起悪い・・・)

すぎるように携帯の待ち受けに映った直樹を見つめて、また切なくなった。

# 告白

---

「実はそうなんだ。ごめん」

目の前でうなだれている直樹を、愛美は冷めた目で見ていた。

「いつ気付いたの？」

いくら何でもタイミングが良すぎる（悪すぎる？）と思ったのだろうか。

今日はカップルたちが愛を確かめ合う、幸せに包まれた日であるというのに、どうして自分は彼女に責め立てられ修羅場を迎えているのかと。

「そんなこと、どうでもいいのよ」

いつ気付こうが、事実は変わらない。

愛美の存在や気持ちを弄んだ罪は、物凄く重いのだ。反省の言葉を述べた位じゃ気持ちが治まらない。

「どっちが本命？」

いつもより1オクターブ低い声でにじり寄る愛美に心底ビビっている様子の直樹は、ゴクリと大きな音を立てて唾を呑み込んだ。

「ごめん」

多くは語らなかった。ただ頭を下げ続ける直樹を見て、急速に気持ちが冷めていくのを感じた。

「分かった。もう行ってあげて」

瞬きをすると涙がこぼれそうで、一生懸命目を見開いた。

こんな日に涙を流しながら別れ話をしている愛美は、さぞかし滑稽に見えるのだろう。

気の毒そうに遠目で見ていた女性もいたが、多くは好奇心の目でこちらを観察していた。

「行ってってば！」

涙は見せたくなかった。ところが、直樹はいつまでたっても立ち上がろうとせず、心配そうに愛美を見ていた。

「今日は行かない。君といるよ」

「どうしてよ。もう別れたんだから、そんな必要ないでしょ」

「それなら尚更、最後に君と1日過ごすよ」

直樹の目は真剣だった。

その場を取り繕うとかよこしまなことを考えているのではなく、愛美を想っていてくれるのが分かって胸が熱くなった。

「んもう、優しくしないでよ・・・」

下を向くと涙がポタリとこぼれた。でも心はホカホカと温かくて、それ以上直樹に「行って」とは言えなくなってしまった。

困っている愛美の手を直樹は優しく包み込み、また「ごめんな」と言った。

周りの人々は「何だ、ただの痴話げんかだったのか」と急に無関心になって、自分たちの世界に戻っていった。

## 作戦

---

愛美が密かに温めていた作戦は、クリスマス・イブという絶好のシチュエーションで実行されることになった。当初考えていた予定とは多少違ってしまっただが、これはこれでアリだとほくそ笑んでいた。

「何だか嬉しそうだね」

(当たり前でしょ)

何も言わず、にっこりとほほ笑んだ。

自分がセカンドだということは、百も承知だ。こんな軽薄な男に夢中だなんて滑稽だとも思う。でも、どうしても手に入れない、ここまで来て引くことなどできない。

衝撃の事実を知った日から、ヒステリックになりそうな自分を抑えて冷静に考えて来た。

どうしたら自分だけのものになるだろう。例え100%の愛情でなくても構わない。徐々にサトへの比率が低くなって、最後に0になってくれればいい。

「今度は難しそうな顔をしているね」

直樹に言われて、ハッと我に返った。

考え事をする、ついつい顔に出してしまうのだ。正直な性格が災いして、表面上だけうまく合わせるということができない。

「ほら・・・夜の予定を考えてないでしょ？だから、どうしようかなと思って」

「ああ、そうだね」

言いながら、ポケットから携帯を取り出してチラリとみた。サトから連絡が来ていないか確認したのである。

今日の予定はキャンセルするのだから連絡すれば良いものを、バレてもなお目の前では電話しにくいのか一向に掛ける様子はなかった。

「彼女に掛けてあげて」

これでこそ、心の広い女の言葉である。

愛美が目指すのは、大きくて広い港のようにドンと構えて船を待つような女になること。

直樹だって、いつでも愛美が待っていると分かれば、安心して船出できるだろう。

・・・いや、実際は船出＝浮気なのだから、船出はして欲しくないのだが。例え出ても、必ず戻ってきて欲しい。また戻ってきたいと思われるような存在でありたいと思った。

「そうだ。私、行きたいところがあるんだ」

「じゃあ出よう」

外に出ると、直樹の腕を取りとどんで歩いて行った。

目的地も告げずに電車に乗り、20分程してから降りた場所は少しサビれた小さな駅だった。

「ここが行きたいところ？」

不思議そうに聞く直樹に向かって、「そうよ。一番行きたい場所」とだけ答えた。

もう目的地は近い。

愛美は深く深呼吸して、ゆっくりと歩き始めた。自分の思い描いた通りに事は運ぶだろうか。でもこれしか方法はない。直樹をつなぎとめる方法は。

しばらくして、こじんまりとした一軒家の前で突然愛美は立ち止った。

「さっ、入って」

「えっ？」

何が起こったのか分からず固まっている直樹の背中を押して、家の中に入った。

「ただいまー」

すると奥の方から、ぽっちゃりした50代位の女性がいそいそと出て来た。

「早かったのね」

そう言いながら、直樹の頭からつま先までを品定めするかのように見回している。

舐めまわすような視線に身震いした直樹が後退りすると、その太い腕でガッチリと肩を押さえて部屋の中に押し込んだ。

「どういふこと??」

動揺する直樹をしり目に、愛美は澄ました顔で黙って前を向いている。

少しして、大柄で屈強そうな男が無然とした表情で向かいの座布団の上に座った。

「ずいぶん軟弱そうな男じゃないか」

開口一番、男は吐き捨てるように言った。

きっと誰を連れてきても文句を言うのだと思う。

家族思いの父親なのだが、見た目が強面なので、気弱な直樹が自由に意見をすることなどできないと初めから分かっていた。

「まずはそちらから挨拶するのが礼儀じゃないかね」

ジロリとひとにらみされると、直樹はアワアワと小刻みに震えながら自己紹介をはじめた。

「ぼっ、ぼく、山上直樹と申します。〇〇商事に勤めて7年になります」

「まさか娘とは遊びで付き合っているわけじゃあ、ないだろうな」

「もっ、もちろんですっ」

言いきる直樹の横で、愛美は冷静に次の分析をしていた。

父親の性格ならば、次の言葉は決まっている。

「年頃の娘と付き合うという事は、どういうことか分かってるだろうな」

「はあ、まあ・・・」

ピンと来ない様子の直樹にイライラし始めた父親は、ドスのきいた声で詰め寄った。

「責任をとるつもりは、あるんだろうなと言っているんだよ」

「もっ、もちろんですっ！」

(やっぱりね)

これでもう、愛美と別れるとは二度と言わないだろう。

当初の予定では、イブの深夜に直樹を呼び出す予定だった。すんなりと別れることを想定していたので、『家で泣いていたら両親に問い詰められ、訳を話した。父親は激怒していて直樹を訴えると言っている』と呼び出すつもりだった。

もちろん自分の株を下げるようなことだけはしたくないので、その場合も『きちんと話せば分かってくれると思うから、一緒に説得して欲しい』とお願いするつもりだった。

それがまさか、こうもトントン拍子でことが運ぶとは、天も味方してくれたに違いない。

隣で青くなつたまま小さくなっている直樹を見ながら、ふとサトのことを考えていた。

2年間も直樹の愛情を独占してきた女である。

(さあ、今度はあなたが苦しむ番よ)

この日から家族の了承のもと直樹と新たなスタートを切った愛美は、見事にセカンドからの脱出をはかることに成功したのだった。

年が明けると、いよいよ二人は本格的に式場を探し始めた。

何箇所か回ってプランや料理を確認し、春ごろには大体のめどがついたのだが、気になることが一つあった。

明らかに直樹の元気がなく、会っている間中上の空で、魂がどこかに飛んでいってしまっているようだった。

「・・・まだサトさんのことが忘れられないの？」

思い切って聞いてみたが、歯切れの悪い答えばかりが返ってきて、肝心の理由を明かそうとはしない。

「今ならまだ引き返せるよ」

もちろん本心ではない。

だが、愛美との結婚がどうしても嫌だと言うのなら、この話に乗ってくるはずである。

「そんなんじゃないよ。今は君しか居ないんだから」

力ない言葉ではあるが、嘘をついているようには見えなかった。

「じゃあ、どうしたのよ。これから夫婦になるんだもの。何かあったら二人で解決していこうよ」

直樹の手を握ると、急に涙ぐみながらプルプルと肩を震わせて泣き始めた。

「・・・？」

そんなに感激したのかしら、と顔を覗き込んだが、次の瞬間、衝撃の真実が告げられた。

「俺、今仕事してないんだ」

「なっ、なっ、なんで？」

頭から冷や水を勢いよく掛けられたような衝撃に、それ以上言葉が出てこない。

「実はサトは〇〇商事のお偉いさんの娘だったんだ。今回のことがバレてリストラされちゃってさ」

結果的に自分が勝ってしまって憐れみさえ感じていたサトに、してやられた気分がいっぱいになった。

「でも大丈夫だよ。直樹君は〇〇商事に入れる位優秀なんだもの」

かなり有名な大学を出ていないと、書類さえ通らないと聞いたことがある。その先もクリアした直樹はさぞかし優秀な人なのだろうと秘かに思っていた。

「違うんだ」

「何が？」

悪い告白ばかりで、優しく聞こうと思っても、段々と声が苛立ってくる。

「実は、2年前に〇〇商事に入るまでは無職だったんだ」

「それって、つまり・・・」

もう考えるのも拒否してしまいたい心境だったが、それでもピンときてしまった。

「サトさんの力添えで入社できたってこと？」

「そうなんだ。黙っててゴメン」

謝られても、今さら引き返せない。

周りには散々自慢してしまったし、会社にも寿会社を報告してしまった後だった。

「どうするのよ！」

テーブルに身を乗り出して直樹を責め立てた。

「就職活動はちゃんとしてるの？私だって今月いっぱい退職が決まってるんだからね」

一気にまくし立てると、珍しく怒った様子の直樹が語気を荒めた。

「分かってるよ。俺だってもう3ヶ月以上も必死で活動してるんだよ」

それを聞いた愛美は絶句した。

年の始めには既に無職だったというのに、のうのうと一緒に式場めぐりをしていたかと思うと、許せない気持ちがふつふつと沸いてきた。

「信じられない！破談よ！」

テーブルをドンと叩くと、負けずに直樹も言い返した。

「ああ、それで結構！お前のせいで俺の人生めちゃくちゃだよ！」

二人はそのまま立ち上がって別々の方向に歩き始めた。

ふと振り返って見ると、直樹の背中には出会ったときのオーラはなかった。

(直樹君を輝かせていたのは、サトさんだったのかしら・・・)

悔しいけれど、結局サトなしでは直樹はただの駄目男だったのである。

「あーあ、これなら2番目だった頃の方が幸せだったなー」

空を見上げると、恨めしいほど青く澄んでいた。

黒いオーラを放ちながら小さくなっていく直樹の後ろ姿に向かって、小さく『バイバイ』と手を振った。